選外佳作の六

公園の椿

藤子

「母さん、春は何時來るの？」
と美代ちやんが、たづねました。
「そうね！　春はね
公園の椿が咲きかけたら來るの」
とお母さんが、仰有いました。
「そう、公園の椿が咲いたら春なの？」
と尋ねました。
「えゝ、そうよ
そしたら美代ちやん學校よ」
「まあうれしい！」
美代ちやんは、お手々を叩いて喜びました。公園の椿が咲いたら春なんです。
「母さん、公園の椿もう咲いてるかしら？」
と美代ちやんが、云ひました。
「そうね、此の頃は暖いから、咲いてるかもしれないわ」
とお母さんが、仰有いました。

「母さん、見に行きませうよ」
と美代ちやんは母さんにおねだりしました。
「でも今日はお洗濯をしなかつたら、いけないの」
とお母さんが、仰有ると、
「でも、一寸だけ行つて見ませうよ」
と美代ちやんは、お母さんのお手々を引張りました。
「美代ちやんは、きかん坊ね！」
とお母さんは、一寸お笑ひになりました。そして、
「じや一度行つて見ませう」
と立たれました。
「まあ！　うれしい！」
兎さんの樣に、美代ちやんは跳び上りました。
御門を出ると畑です。綠色の麥の芽が、親指位に伸びてゐました。畑を横切ると小さな川が有ります。
「母さん、此の川に目高澤山居てよ」
と美代ちやんは、母さんに教へてあげました。
「おや、そうかい」
母さんは美代ちやんの後から、ボツリ〳〵歩いておいでになります。
「母さん、公園はね、此の川をずうつと通つて行つたら行けるのよ」
と美代ちやんは母さんに教へてあげました。
「あら！そんな近道が有つたの？」
とお母さんは不思議相に仰有いました。

美代ちやんはズン〳〵歩きました。川のふちの細い道です。一寸足が滑るとツルリと川へはまり相です。

「よもぎが澤山生えてるね」

と後でお母さんが仰有いました。

「よもぎつてなあに？」

と美代ちやんはあと戻りをしました。母さんは

「ホラ、お雛祭りの時、お菱餅をするでせう」

と云つて、青い柔か相な葉を見せて下さいました。

「あゝ、あれなの」

美代ちやんも思ひ出しました。

お菱餅に青い色がついてたのを思ひ出しました。

「あら、母さんもうあれが公園よ」

と美代ちやんが、指をさして云ひました。

「早かつたのね」

母さんは、美代ちやんに遅れない樣に、サッサと歩いておいでになりました。

「椿のお花が咲いてるかしら？」

美代ちやんは、背伸びをして見ました。

「またらしいわね」

お母さんは、美代ちやんを抱きあげて下さいました。大きな椿の木が、ニョッキリ立つてるました。黑い葉がピカ〳〵光つてるました。でもお花は一つも咲いてるませんでした。

「椿のお花咲いてないね」

と美代ちやんは、一寸悲し相なお顔をしました。

「椿のお花はまだおねんねよ、もう少し暖くなるまでおねんねよ」
とお母さんが、美代ちやんをソッと下して下さいました。「又、今度來ませうね」
お母さんは、美代ちやんのお手々を引張つて下さいました。
「今度來たら咲いてるかしら?」と美代ちやんは椿の木を見上げました。
「えゝ、暖い日が續くと直ぐ咲きますよ」とお母さんが、美代ちやんの頭を撫でゝ下さいました。
「歸りませうね」やつと美代ちやんも、歸りかけました。それから毎日暖いお天氣が續きました。
「母さん、もう公園の椿が咲いてるかしら」と尋ねました。
「そうね!今日位だと咲いてるかもしれないわ」とお母さんが、仰有いました。
「ね!母さん、もう一ぺん公園へ行つて見ませう」、と、又美代ちやんがおねだりしました。
「今日は母さん駄目、だつて、お腹がとても痛いのよ」と仰有るお母さんのお顔は、本當に蒼くて、苦し相でした。
「だから美代ちやん一人で行つてゐらつしやい」
と仰有いました。「いやーん 美代ちやん一人で行くのいやーん」
と美代ちやんは駄々をこねました。
「お願ひだから美代ちやん、今日は御免してね。その代り明日は連れて行つてあげませうね。」
「まあうれしい!本當?母さん」
「えゝ本當よ、だから今日は溫和しく遊んでゐらつしやいね」
と仰有いました。美代ちやんはソッとお部屋から出ました。そしてお靴を履いて、御門を出ました。麥の芽の間に、黃色い菜の花が咲いてゐました。
美代ちやんは畑を横切りました。小さな川の所へ來ました。チロ〳〵とお水が流れてゐます。

川のお水がお話してるのかも知れないと思ひました。美代ちやんは、ぢつと聞いてるました。すると向ふの方から、赤い物が流れて來るのです。

「おや？あれは何かしら」

赤い物は、だん〳〵近寄つて來ます。美代ちやんはあわてゝ、お靴を脱ぎました。

ヒャッと冷い川へ入りました。そしてその赤い物をすくひました。

「まあ！　椿のお花！」美代ちやんは、お靴も履かずに、お家へ入りました。

「母さん！　もう春が來てよ。ホラ」

美代ちやんは、赤い椿の花をお母さんの方へ差出しました。

「まあ！　赤い椿だこと！」

と仰有るお母様のお顔も、さつきとは見違へるばかりでした。ほんのり櫻色の綺麗なお顔でした。

「春が來たのよ、ラ、ランラン」

美代ちやんはすつかり嬉しくなりました。

お縁に暖い日が射してるます。